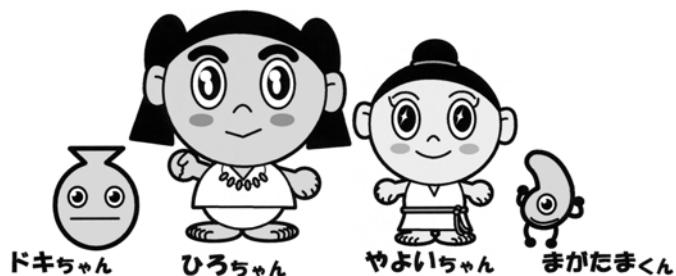


平成25年度 ひろしまの遺跡を語る
城館研究最前線
–発掘城館から探る中世社会–
記録集



平成27（2015）年
公益財団法人広島県教育事業団

開会あいさつ

公益財団法人広島県教育事業団

理事長 大原 節雄

皆さん、おはようございます。本日は、「平成25年度ひろしまの遺跡を語る」会を開催いたしましたところ、皆様には新年早々、寒い中を朝早くから御参加をいただき、誠にありがとうございます。

この「ひろしまの遺跡を語る」という催しは、当初は私どもが行った発掘調査の成果を、いち早く県民の皆様に御紹介したいという思いから、その年その年の発掘調査報告会として始まっております。

そして、平成18年からは毎年年明けのこの時期に、シンポジウムをメインとした開催となっておりまして、その開催回数も今回で通算33回を数えております。

これもひとえに、本日お越しの皆様をはじめ、多くの方々の御支援のたまものでございまして、心から感謝を申し上げます。

さて、今回は、広島県の中世の城館にスポットを当て、「城館研究最前線－発掘城館から探る中世社会－」というテーマで開催いたします。

広島県内には、中世城館の遺跡が1,500か所余り確認されており、これは全国的にも城館遺跡数の多い県の一つでございますし、また最近では、幅広い層の方々が城館遺跡に関心を示されておりまして、こうしたことからも今回取り上げたテーマというのは時宜を得たものと思っております。

本日は、まず、当事業団の職員3人が、事例報告を行います。そして、その後、当事業団埋蔵文化財調査指導委員の小都隆さん、それから滋賀県立大学教授の中井均さんに、それぞれ御専門分野の研究に基づく基調講演をお願いしております。

これに続きまして、小都隆さんをコーディネーターにシンポジウムを行って議論を深めてまいります。

当事業団といたしましては、これからも様々な機会を捉えて、日ごろの発掘調査や調査研究の成果の公開に努めてまいりたいと考えております。

皆様方には、今後とも、私どもの埋蔵文化財の調査と研究、そしてこれらを継承していくという取組みに対しまして、より一層の御理解と御支援をいただくよう、よろしくお願い申し上げ、開会の挨拶といたします。



目 次

開会あいさつ	(1)
事例報告 I 「家ノ城跡（尾道市木ノ庄町）の発掘調査」	
主任調査研究員 唐口 勉三	(3)
事例報告 II 「牛の皮城跡（尾道市御調町）の発掘調査」	
主任調査研究員 山田 繁樹	(14)
事例報告 III 「城平山城跡（呉市焼山西）の発掘調査」	
調査研究員 山澤 直樹	(26)
基調講演 I 「発掘調査から見た広島県の中世城館」	
(公財)広島県教育事業団埋蔵文化財調査指導委員 小都 隆	(41)
基調講演 II 「戦国の山城を掘る－発掘調査で明らかになった山城の実像－」	
滋賀県立大学教授 中井 均	(69)
シンポジウム「発掘城館から探る中世社会」コーディネーター 小都 隆	(95)
閉会あいさつ	(116)

平成25年度 ひろしまの遺跡を語る「城館研究最前線－発掘城館から探る中世社会－」

【日程】 平成26年1月11日（土） 10：00～16：20

【会場】 広島県民文化センター 多目的ホール 広島市中区大手町1-5-3

【内容】

10：00～10：10	開会行事
10：10～10：40	事例報告 I 「家ノ城跡（尾道市木ノ庄町）の発掘調査」
	主任調査研究員 唐口 勉三
10：40～11：10	事例報告 II 「牛の皮城跡（尾道市御調町）の発掘調査」
	主任調査研究員 山田 繁樹
11：20～11：50	事例報告 III 「城平山城跡（呉市焼山西）の発掘調査」
	調査研究員 山澤 直樹
13：00～14：00	基調講演 I 「発掘調査から見た広島県の中世城館」
	(公財)広島県教育事業団埋蔵文化財調査指導委員 小都 隆
14：00～15：00	基調講演 II 「戦国の山城を掘る －発掘調査で明らかになった山城の実像－」
	滋賀県立大学教授 中井 均
15：15～16：15	シンポジウム「発掘城館から探る中世社会」
	コーディネーター 小都 隆
	パネラー 中井 均 唐口勉三 山田繁樹 山澤直樹
16：15～16：20	閉会行事
	全体司会 調査研究員 川崎真二

<主催> 公益財団法人広島県教育事業団

[表紙写真：牛の皮城跡（広島県立埋蔵文化財センター提供）]

事例報告 I 「家ノ城跡（尾道市木ノ庄町）の発掘調査」

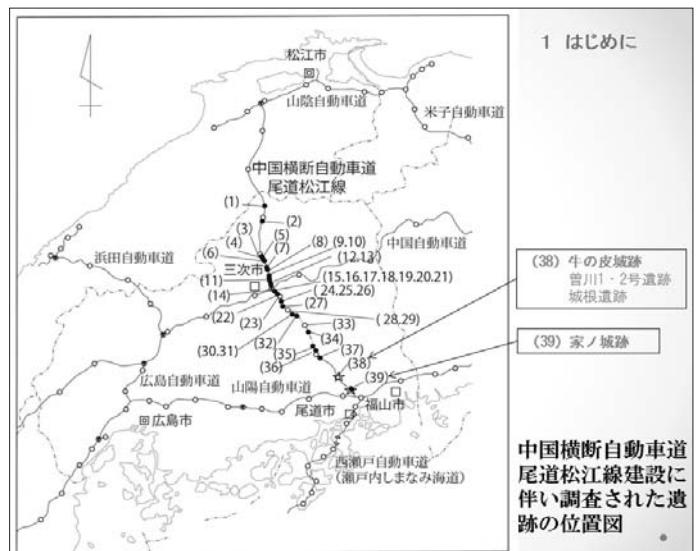
主任調査研究員 唐口 勉三

広島県教育事業団の唐口と申します。よろしくお願いします。これから尾道市木ノ庄町にある家ノ城跡の発掘調査について報告します。

家ノ城跡の発掘調査は中国横断自動車道尾道松江線建設事業に

伴って実施しました。これは尾道松江線の路線図と調査された遺跡の位置図です【スライド1】。黒丸がついているところが調査した遺跡の場所です。尾道市内では5か所の遺跡の調査を行いました。牛の皮城跡、曾川1号・2号遺跡、城根遺跡、家ノ城跡の5か所です。

家ノ城跡は一連の調査の中で最も南側の遺跡です。山陽自動車道が東西に走っていますが、尾道ジャンクションから1.5km北側に位置します。調査は平成15年から19年にかけて5次にわたって行いました。



【スライド1】中国横断自動車道尾道松江線建設に伴い調査された遺跡の位置図

まず、家ノ城跡の位置について見ていきます。これは周辺遺跡の分布図です【スライド2-a】。家ノ城跡は尾道市木ノ庄町木梨にあります。尾道市木ノ庄町木梨は尾道の市街地の北側で、旧尾道市の北部に当たります。全体的に山がちの地形で、その谷間に松永湾に注ぐ藤井川の支流木梨川が南北に流れています。その木梨川沿いに平坦

1 位置と環境



▲周辺遺跡分布図



▲周辺地形図

【スライド2－a（左）・b（右）】周辺遺跡分布図と周辺地形図

地が形成されています。中世には木梨荘という荘園があり、杉原氏が地頭職として荘園を支配しており、木梨はその本拠地ということでした。家ノ城跡から北約1kmのところに杉原氏の居城とされる広島県史跡の鷺尾山城跡があります。鷺尾山城跡については後ほど触れたいと思います。近世には石州街道という石見につながる道が木ノ庄村の市原というところを通っており、周辺のこの辺りは交通の要衝でした。

次に、家ノ城跡の概要について簡単に触れます。周辺地形図を見ていただくと、家ノ城跡は南北に長い独立丘陵の北側に立地しています【スライド2－b】。東側に木梨川が流れています。西側にも小さな谷が入り込んでいます。山城の中心となる郭は3か所あり、丘陵の北側で標高の高い所に1郭があります。その1郭から南に延びる尾根上に2郭・3郭があります。今回は1郭とその周辺及び1郭の南東側の尾根を対象に調査を行い、2郭・3郭は調査しておりません。これは4次調査の時の北から見た空中写真です【スライド3】。手前に1郭があります。南北方向に丘陵が延びており、

その上に城跡が立地しているのが分かると思います。写真の左側の東側の谷合に木梨川が南の方に流れています。これは、5次調査の時の写真です【スライド4-a】。写真の左側に木梨川が流れています。その辺りが平坦地になっています。丘陵の北側の辺りは丘陵が落ち込んでおり、石州街道につながる道があります。これも5次調査の時の写真で、手前に水田が広がっている様子が分かると思います【スライド4-b】。家ノ城跡の最も高い所は1郭ですが、その標高が約130mで、木梨川から60~70mの標高差があります。



▲家ノ城跡近景（空中写真、北から）

【スライド3】家ノ城跡近景



【スライド4-a（左上）・b（右下）】家ノ城跡遠景

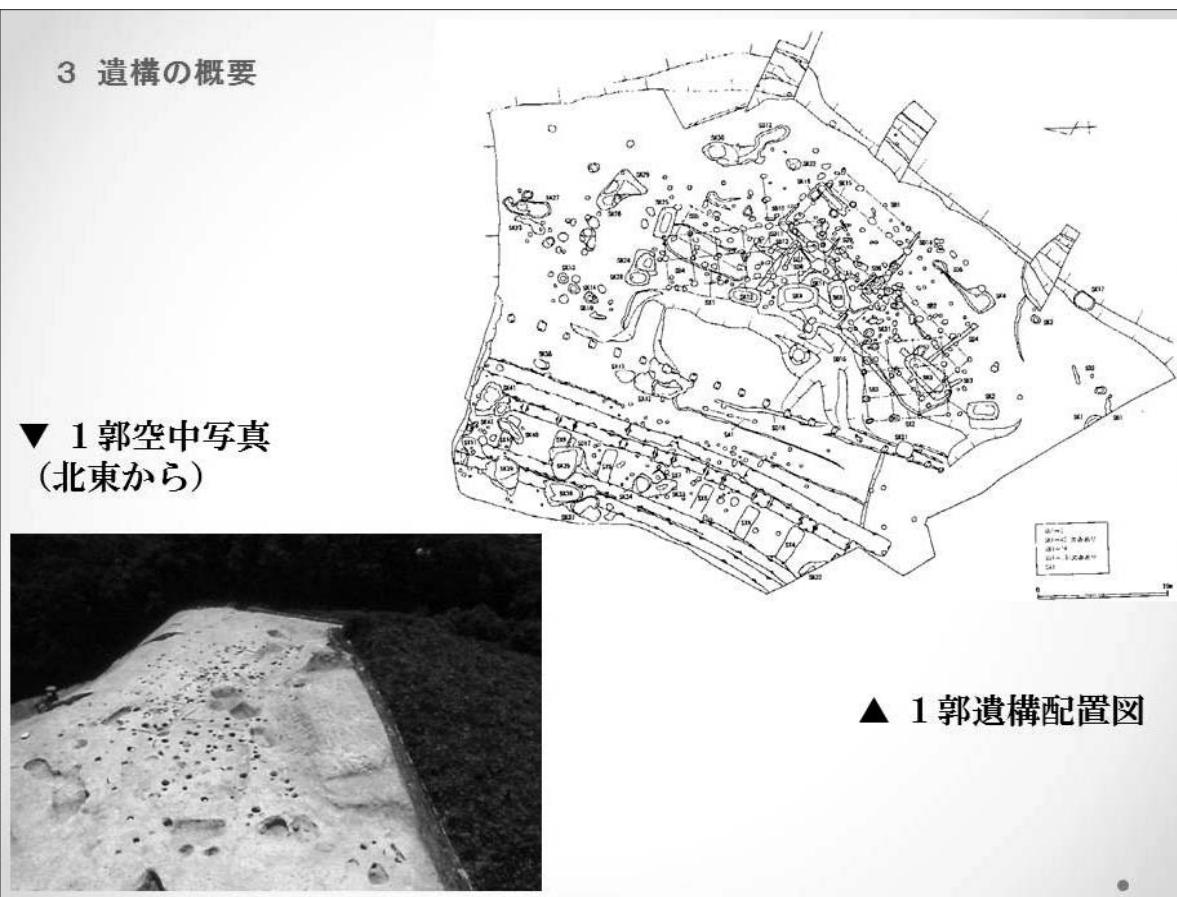
次に、1郭の調査について見ていきます。これは1郭周辺遺構配置図です【スライド5-a】。この図面は調査をした範囲なので、この周りに遺構が広がっていると思われます。この図面の下の方に1郭があり、その周辺に北西尾根、北尾根、北東尾根、東側の切岸があります。これは真上から見た空中写真です【スライド5-b】。

まず、1郭の調査について見ていきます。これは1郭遺構配置図です【スライド6-b】。1郭は尾根の頂部の岩盤を削って、長さ約60m、幅約45mの広い平坦地をつくっています。中央に長さ約20mの削り残しがあります。この辺りが最も高い所です。

3 遺構の概要



【スライド5-a (左)・b (右)】1郭周辺遺構配置図, 1郭周辺空中写真



【スライド6-a (左下)・b (右上)】1郭空中写真, 1郭遺構配置図

中央の削り残しの東側を中心に建物跡が5棟、溝状遺構、土坑、焼土、多数の柱穴などが確認されています。これは4次調査の時の空中写真で、東側の部分の写真です【スライド6-a】。写真の左側（東側）の部分に遺構が密集している状況が分かると思います。写真の右側は削り残しの部分で一段高くなっています。これも1郭の東側の部分で南から見た写真です【スライド7-b】。写真の左側の高いところが最も高い所です。本来は、この高さの斜面がなだらかに周りに下っていたと思われますが、その斜面を削って平坦地をつくっています。この平坦面に遺構が密集している様子が分かると思います。なお、左奥に鷲尾山城跡が見えます。中世の当時も日常的に鷲尾山城を意識していたかもしれません。これは5次調査の時の1郭の西側の写真です【スライド7-a】。最も高い所の西側に遺構が分布しており、左上の方に土坑などが見つかっています。この部分は、ぶどう畑の開墾の際に大きく削られ搅乱をかなり受けているようです。

次に、1郭の建物跡を見ていきます。1郭では建物跡は5棟を確認しました。

第1表のとおりです。周囲には多数のピットがあり、

更に多くの建物が重なり合
い、何回も建て直しが行わ
れたと思われます。これは
SB1の写真です【スライ
ド8-a】。SB1は2間
×4間の掘立柱建物跡で、

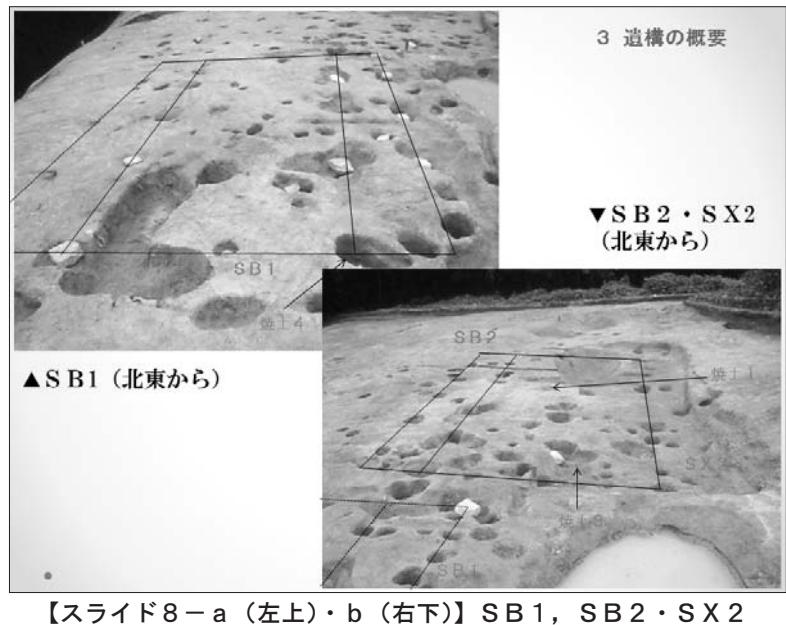


【スライド7-a (左上)・b (右下)】1郭西半部、1郭東半部

遺構名	規模(梁行×桁行)	面積	方位	内 容
SB1	2間×4間 (3.2m×7.75m)	24.8m ²	N 43° E	掘立柱建物跡、根石を伴う柱跡多い 両側に並行するピット列があり、底を伴うものか?(底を含めると梁行・4間(5.75m)となり、面積は44.6m ² となる)
SB2	2間×3間 (3.65m×8.0m)	29.2m ²	N 49° E	掘立柱建物跡 南東側に並行するピット列があり、底を伴うものか?(底を含めると梁行・3間(4.75m)となり、面積は38m ² となる) SX2(段状遺構)を伴う
SB3	3間×3間 (6.0m×6.1m)	36.6m ²	N 4° W	掘立柱と礎石を併用した建物跡、根石を伴う柱跡多い 総柱の建物跡
SB4	2間×6間 (3.95m×11.85m)	46.8m ²	N 5° W	掘立柱建物跡 総柱の建物跡
SB5	1間×3間 (2.35m×5.6m)	13.2m ²	N 26° E	礎石建物跡 SX1(段状遺構)を伴う

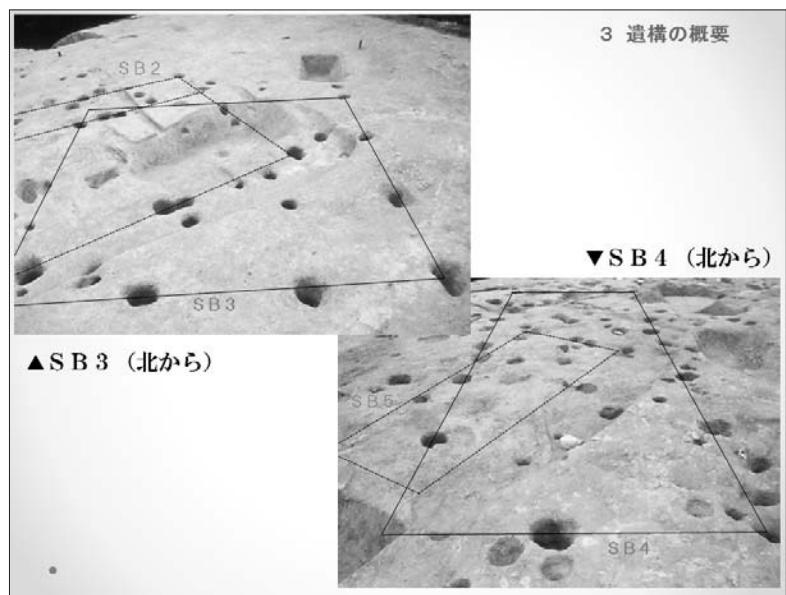
第1表 1郭・建物跡

両側に庇が付くと思われます。SB1の右下の焼土4では柱穴の上に焼土が広がっており、SB1がなくなった後、鍛冶炉が設けられたと思われます。これはSB2の写真です【スライド8-b】。SB2は2間×3間の掘立柱建物跡で、南



側に庇が付くと思われます。西側には64cmぐらいの深さの段を掘って平坦面をつくつており、この平坦面に建物をつくったと思われます。なお、SB2の建物の内外に焼土があり、SB2がなくなった後、鍛冶炉が設けられたと考えられます。これはSB3の写真です【スライド9-a】。3間×3間の建物跡で、掘立穴と礎石を使った建物であり、倉庫と思われます。SB3はSB2と重なっており、SB2の後にSB3がつくられたと考えられます。これはSB4の写真です【スライド9-b】。SB4は2間×6間の南北方向に長い掘立柱建物跡で、これも倉庫ではないかと考えられます。

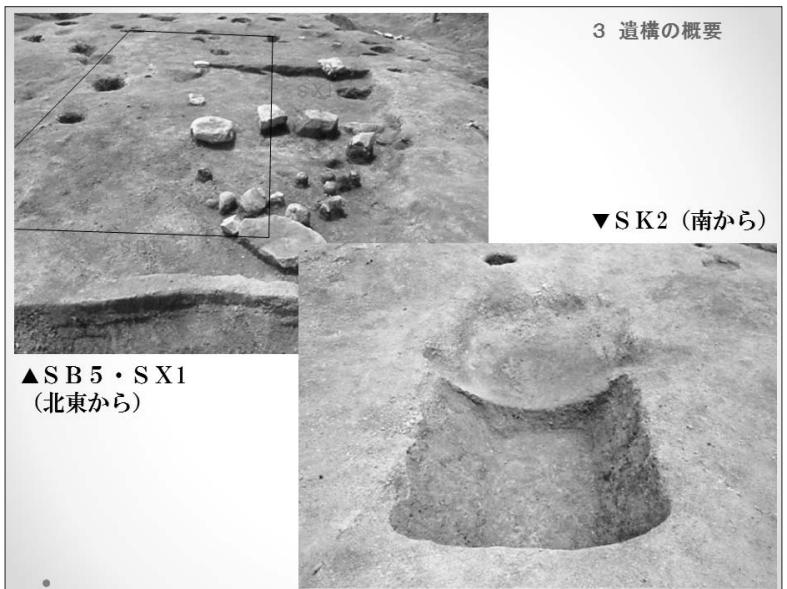
SB4はSB5と重なっており、SB5の方が新しいと考えられます。これがSB5ですが、SB5は1間×3間の礎石建物跡です【スライド10-a】。右側の方の礎石が残っていますが、左側の方の礎石はなくなっています。SB5には深さ22



cmほどの段が伴っており、
その段をSX1と呼んでい
ます。

次に土坑についてですが、
土坑もいくつかの形があり、
長方形のものがいくつかあ
ります。これはSK2の写
真です【スライド10-b】。
長方形の土坑で、この写真

は半分堀った状態です。断
面を見ると底とか壁に粘土
を貼っている状況があり、
水溜の可能性もあると思わ
れます。このような土坑が
5基ほど建物の周りに見ら
れます。これはSK9の写
真です【スライド11-a】。
これも長方形の土坑で、そ



【スライド10-a (左上)・b (右下)】SB5・SX1, SK2

の中の周りに粘土を貼り、たくさん石を投げ込んでいます。他に、円形の土坑もあ
ります。これはSK14の写真です【スライド11-b】。その底に備前焼の甕が据えられ
ており、水甕か貯蔵の施設と考えられます。円形の土坑が両脇に3基ほど並んでおり、
水甕か貯蔵の施設を設け営んでいた可能性も考えられます。

以上が1郭の主な遺構です。次に、1郭の周辺の尾根について見てきます。
これは1郭の北東側の尾根を西から東に向けて撮った写真です【スライド12-a】。
平坦面が階段状に並んでいる様子が分かると思います。右側の1郭から7.5mほど下

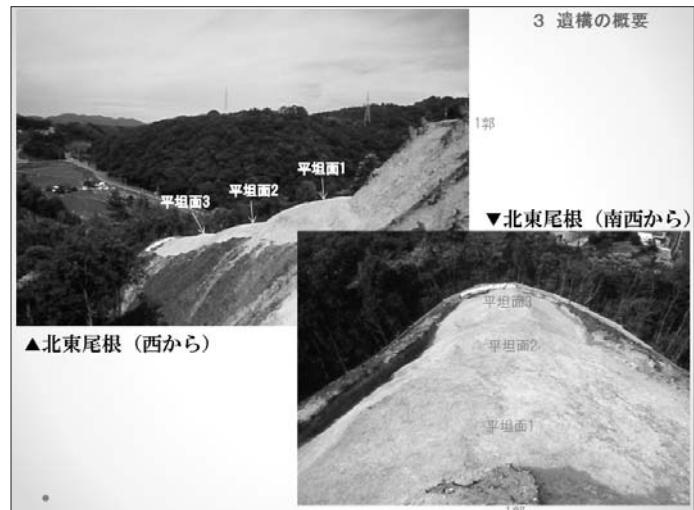


【スライド11-a (左上)・b (右下)】SK9, SK14

がった所に平坦面 1 があり、さらに平坦面 2、平坦面 3 があります。これは 1 郭から見た写真です【スライド12-b】。平坦面 1～3 が並んでいる様子が分かります。なお、平坦面 1 は細い通路状のものがあり、1 郭をめぐる通路につながる平坦面と考えられます。

これは北尾根の写真です【スライド13-b】。ここも階段状に平坦面があります。1 郭から 4 m 下がったところに平坦面 4 があり、そこから 7 m ほど下がったところに平坦面 5、平坦面 6、平坦面 7 と階段状につくられています。これは平坦面 4 から北尾根を見た写真です【スライド13-a】。平坦面が並んでいる様子が分かると思います。

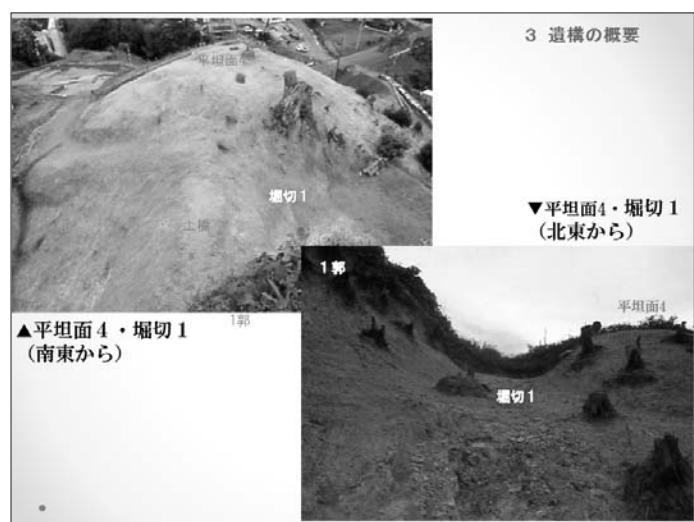
これは 1 郭から見た平坦面 4 ですが、平坦面 4 と 1 郭の間に堀切があります【スライド14-a】。堀切には狭い掘り残しがあり、幅60cm ぐらいの狭い通路があったと思われます。これは堀切 1 の写真です【スライド14-b】。



【スライド12-a（左上）・b（右下）】北東尾根



【スライド13-a（左下）・b（右上）】北尾根



【スライド14-a（左上）・b（右下）】平坦面4・堀切1

平坦面 4 と 1 郭の間に幅が 6～8 m、深さ 1～3.5 m の堀切を

掘っています。

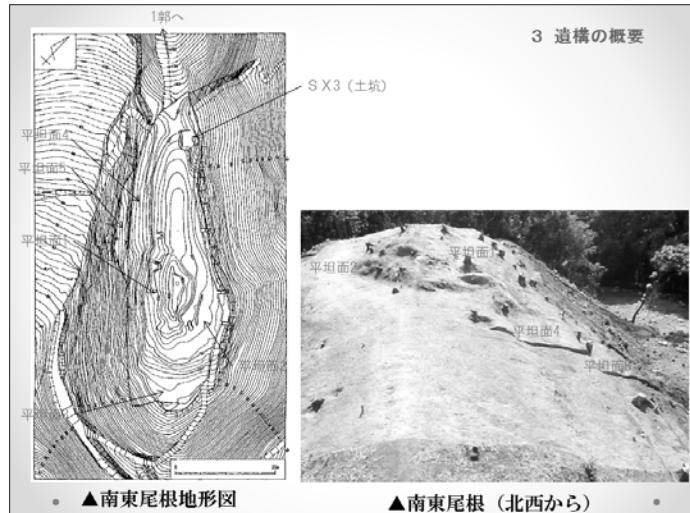
これは、南東尾根の図面です

【スライド15-a】。この尾根の中
心部とその西側を中心に調査して
います。尾根の中央に南北10mぐ
らいの小山が掘り残してあり、そ
の周りに平坦面が5か所つくられ
ています。平坦面には建物跡は確
認されていませんが、簡易な施設
の存在は想定されます。

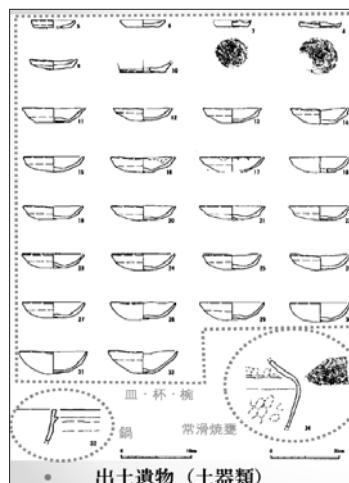
以上のように、1郭の周りの尾
根に階段状の平坦面をつくってい
ます。

出土遺物について簡単に触れま
す。遺物は1郭を中心に出土して
います。土器、土製品、石製品、

鉄製品、銅製品など、多種多様のものが出土しています。これはS B 5に伴うS X 1
から出土した土器です【スライド16-a】。土師質土器の皿・杯・椀があります。左
下に土師質土器の土鍋、右下には常滑焼の甕があります。福山市の草戸千軒町遺跡出
土遺物の分析から14世紀中頃の土器ではないかと考えられています。この表を見ると、
1郭周辺で土器、国産陶器、輸入陶磁器など多種類のものが出土していることが分か
ると思います【スライド16-b】。常滑焼、瀬戸焼、備前焼、亀山焼、東播系須恵器
など、東海地方から中国地方の焼き物が出土しています。これは鉄製品の図面です【ス
ライド17-a】。右上が鉄鏃です。三角形の鉄鏃と先端が2つに分かれた雁又と呼ば
れる鉄鏃の2種類があります。星兜と呼ばれている兜の破片もあります。刀状の鉄製



【スライド15-a（左）・b（右）】南東尾根地形図、南東尾根



【スライド16-a（左）・b（右）】出土遺物（土器類）、
1郭周辺中世土器組成表

	点数	重量(g)
土師質土器*	2099	73.1% 24910.40 34.1%
瓦質土器	203	7.1% 5654.68 7.8%
小計	2302	80.2% 30565.08 41.9%
亀山焼	94	3.3% 2241.12 3.1%
東播系須恵器	18	0.6% 754.96 1.0%
須恵器系土器	38	1.3% 521.55 0.7%
備前焼	359	12.5% 35721.82 48.9%
常滑焼	9	0.3% 2297.87 3.2%
瀬戸焼	31	0.1% 93.39 0.1%
不明	10	0.4% 120.65 0.2%
小計	531	18.5% 41751.36 57.2%
青磁	16	0.6% 149.98 0.2%
白磁	12	0.4% 419.18 0.6%
青白磁	8	0.3% 97.19 0.1%
天目	1	0.0% 5.15 0.0%
小計	37	1.3% 671.50 0.9%
計	2870	72987.94

【スライド16-a（左）・b（右）】出土遺物（土器類）、
1郭周辺中世土器組成表

品もあります。ほかに鉄釘なども多数あります。石製品は、サイコロ、碁石、石鍋、石鍋の破片を加工した温石、砥石などがあります【スライド17-b】。銅製品は懸仏、古錢が、土製品は土錘、鞴の羽口があります。そのほか、鉄滓、炉壁などがあります。

最後に鷲尾山城との関係について若干触れておきます。これは南から見た写真で、家ノ城跡が左手前にあります【スライド18-a】。中央の奥の方に鷲尾山城跡が見えます。家ノ城跡と鷲尾山城跡とは約1km離れています。鷲尾山城跡の標高は約330

m、家ノ城跡の標高は約130mなので、約200mの標高差があります。鷲尾山城跡には尾根上に郭が数段つくられており、石垣・堀切などもあります。これは鷲尾山城跡から見た家ノ城跡の写真です【スライド18-b】。すぐ近くに家ノ城跡が見えます。家ノ城跡と鷲尾山城跡はお互いに間近に、常に見られる位置関係にあることから、両者は密接な関係があったと思われます。

最後のまとめとして、遺物については14世紀中頃の土師器が多く、国産陶器・輸入陶磁器も多様なものがあり、土製品、石製品、鉄製品など多種多様なものがあるということです。



【スライド17-a（左）・b（右）】出土遺物（鉄製品・石製品）



【スライド18-a（左下）・b（右上）】家ノ城跡と鷲尾山城跡、
鷲尾山城跡からみた家ノ城跡

遺構については建物は少なくとも3時期の移り変わりがあったと考えられます。最初に比較的大きな庇が付いた建物があって、その後、倉庫がつくられたようです。鍛冶関係の作業場にも利用されたと考えられます。

城跡の性格については有力者の住居の機能が伺え、城跡の規模・出土遺物・検出した遺構などから有力者がつくった城と見られます。城主については特定することは困難ですが、位置関係から鷲尾山城との密接な関係が伺えます。

以上、家ノ城跡の発掘調査についての報告を終わります。御静聴ありがとうございました。

5まとめ	
まとめ	
○遺物…	<ul style="list-style-type: none">・土師質土器は14世紀中頃のものが多い。・国産陶器・輸入陶磁器は多様である。・土製品・石製品・鉄製品・銅製品など多種多様。
○遺構…	<ul style="list-style-type: none">・建物跡は少なくとも3時期の変遷がみられる。・庇をもつ比較的大規模な建物がある。・その後、倉庫と思われる総柱の建物に建て替える。・鍛冶関係の作業場にも利用される。
○城跡の性格…	<ul style="list-style-type: none">・有力者の居住地の機能がうかがえる。・地域の有力者がつくった城とみられる。・鷲尾山城との密接な関わりがうかがえる。
ご清聴ありがとうございました。	
【スライド19】まとめ	

出典一覧

スライド1：山田繁樹「中国横断自動車道尾道松江線に伴う発掘調査成果～庄原市域を中心にして～」『企画展「高速道路建設でわかった中国山地の歴史」』記念講演会資料 2013年 の第1図を修正して作成。

スライド2～17・18-b：財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（17）家ノ城跡』2012年 の図・図版より作成。

スライド18-a：広島県埋蔵文化財センター収蔵写真資料より作成。

スライド19：発表者作成。

事例報告Ⅱ 「牛の皮城跡（尾道市御調町）の発掘調査」

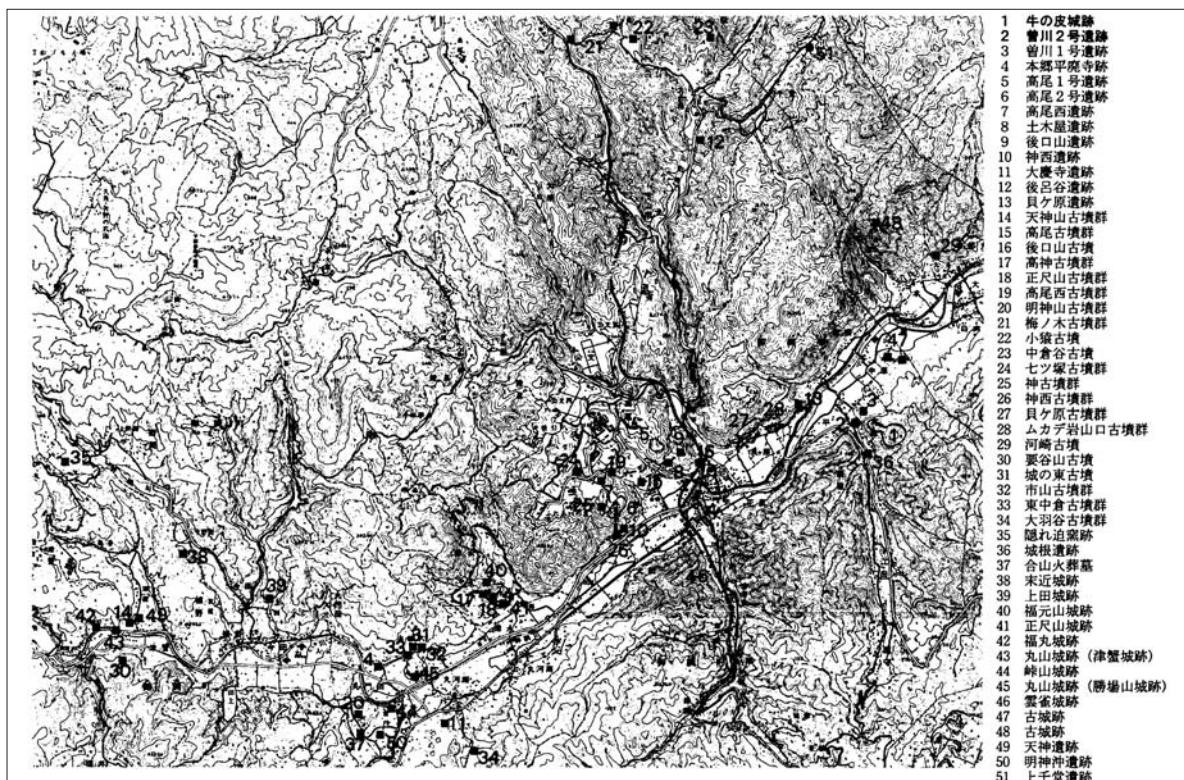
主任調査研究員 山田 繁樹

教育事業団の山田です。これから牛の皮城跡の発掘調査の報告をさせていただきます。

牛の皮城跡は、家ノ城跡と同じように調査は尾道松江線の工事に伴い行っています。調査は1次から4次にわたっており、1次調査



が平成15年1月から始まっています。当時、私、福山市にあります広島県立歴史博物館に勤めておりまして、遺物の貸し借りのときに、遺跡の前を通るときに「あんな高いところを調査するのは大変じゃな。僕だったら絶対に行かんな」と思っていたんですけど、次の年、異動でそこの調査の担当になりました。



第1図 周辺遺跡分布図

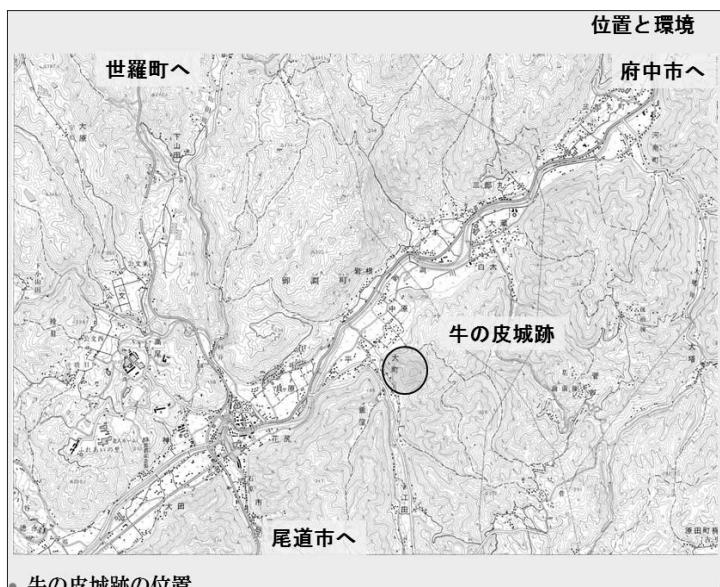
第1図を見てください。図面の1番のところが牛の皮城跡の位置になります。これは御調町の周辺の主な遺跡の分布図ですが、この牛の皮城跡の前を流れている御調川という川の両岸には弥生時代から古墳時代、中世までの遺跡が多く密集している地区ということが、この図面で分かっていただけだと思います。

中世に関する遺跡等は、番号でいうと39番から48番が山城関係の遺跡になります。この図面の左側の方に位置している38番の末近城跡というのも同じ年ぐらいに調査をしています。これは午後の話の中で出てくるかと思います。

それでは資料に沿って写真を使って説明をしていきたいと思います。

牛の皮城跡の位置をこの図で見ると、先ほど説明させてもらったように、ちょうど中央の丸で囲った部分ですね【スライド1】。北側にあるのが御調川で府中市の方へ、北側は世羅町の甲山ですね。南側は尾道の方へ行く道に面した小高いところに遺跡、お城が位置しています。写真で見るとこのような位置関係になります【スライド2】。

牛の皮城跡は、北郭群と、この北郭群の南側にもう1つ郭があって、2つの郭群で構成されている非常に大規模なお城に



【スライド1】牛の皮城跡の位置



【スライド2】牛の皮城跡空中写真

なっています。調査をしたのは、そ
のうちの北郭群を行いました。

この写真は正面から見たところで
す【スライド3】。城跡の南側の道は、
今は新しいのですが、山沿いに古い
道があります。これは先ほど話があ
りました家ノ城跡とか、鷲尾山城跡
の方に続く道が現在でもあります。

この写真は北側の山の中腹から正
面を見た状況です【スライド4】。
階段状に郭がつくられている様子が
分かるかと思います。

この写真は冬に葉が落ちている状
況の時に、御調川北東側の横から
撮った写真です【スライド5】。南郭
群の平坦な状況と北郭群が階段状に
つくられている状況と南郭群との距
離、高低差がかなりあるということ
もこの写真で見ると分かりますね。

この図面で説明しますと、南郭群
から北郭群は直線距離で180m、高
低差が65mあります【スライド6】。北
郭群と麓の水田との標高差が大体60
mあります。

調査の時は、西側の麓にプレハブ



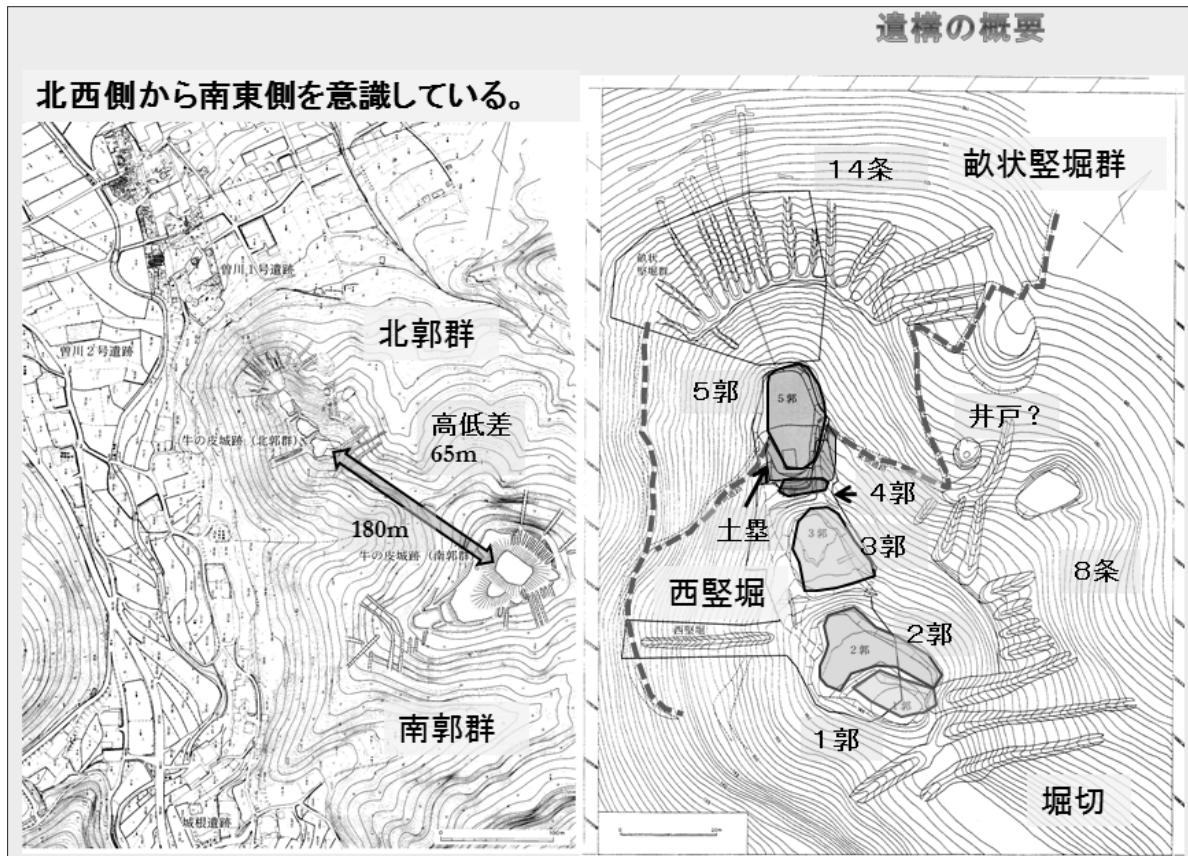
【スライド3】牛の皮城跡空中写真



【スライド4】牛の皮城跡遠景



【スライド5】牛の皮城跡遠景



【スライド6】牛の皮城跡郭群地形図

がありましたので、毎日北側に廻って堅堀の間を歩いて登っていました。大体20分から30分ぐらいかけて、作業員さんは弁当とか、僕たちは水をかついで登り降りしていました。

牛の皮城跡の特徴というのは、北郭群にしても南郭群にしても敵状の堅堀が非常に特徴的な城跡でして、調査は一番南側の方から1郭、2郭、3郭、4郭、5郭のほぼ全面の調査を行っています。

ただ、家ノ城跡で確認されたように、この郭の面には土坑とか穴とか、掘立柱建物の柱穴とか礎石とか、建物が建っていた痕跡が全然出ていません。ただ、釘が出ていますので、簡易的な建物が建っていたんだろうということぐらいしか想定できません。そういう意味では、家ノ城跡とは全然性格が違ったものなのかなと考えられます。

右側の図の北東側にある点線の部分は、もともと調査前に5郭に神社が建っており、神社に登る現代の道だったんですが、本来、ここを通って北郭群まで登る道だったと

も考えられます。

あと西側の点線の部分も調査の時に分かったんですが、比較的平坦な堅堀をつなぐ通路状のものが確認できました。

先ほど言いましたように、家ノ城跡のような建物跡や土坑などが見つかっていないので写真のような状況でしかないんですが、手前が1郭になります【スライド7】。奥側が2郭になります。

ここからは、金銅製の鉢とか、土錘が出土しています。何でお城から土錘が出るのかと言われると、答えがなかなかないんです。山城の調査でも、網の重りになる土錘が出てくる調査例があります。1・2郭では土錘も出でるという事例となります。前の川で漁をしていたのかとも考えられますけど。

次は3郭になります【スライド8】。3郭の写真の右側のネットの北側の部分が神社まであがってくる道があって、その神社があった5郭から3郭、2郭、1郭に上にあがる通路状のものが左側で確認できています。3郭の面積も結構広いですが、明確な柱穴とかは出ていません。



【スライド7】1郭・2郭



【スライド8】3郭

この写真は4郭と5郭の状況になります【スライド9】。4郭というのは郭としていいのかどうか分かりませんけど、非常に幅の狭い平坦面です。ちょうど5郭の矢印の辺りで、土壘状の高まりといいますか、削り残しといいますか、僅かな高まりで土壘が残っていました。右側上の写真は、手前から5郭、4郭、3郭、2郭という状況ですね。右側の端が通路状の平坦面になります。

左側の写真の橋脚の部分が尾道松江線で、橋脚の北側からトンネルとなって北側の方につながっています。現状では、この辺りは今は削られて残っていません。平坦面以外では、西側で堅堀が1条新たに確認できました。この写真の左側の階段が見える部分です【スライド10】。どのくらいの角度かといいますと、写真の右下のような状況です。調査する時も下に滑って落ちないかというような感じで、非常に危なかったんですけど、苦労して掘りました。

先ほども言いましたように、このお城の特徴的な施設というと、やはり畝状の堅堀になるかと思います。この写真は上から見た状況です【スライド11】。写真には、今回調査した範囲しか写っていませんが、図面【スライド6】でお示ししたように、



【スライド9】5郭

• 5郭 (南東から)



• 4郭

遺構の概要



【スライド10】西堅堀

• 西堅堀 (北西から)

ここからずっと北側の斜面に向かって全部で22条の豊堀がずっと掘られています。この写真も豊堀の状況です【スライド12】。

左側の写真で南側に横堀を掘って、縦に掘った土を更に土壘状に盛っている状況がお分かりいただけるかと思います。この地点も非常に急斜面なので、

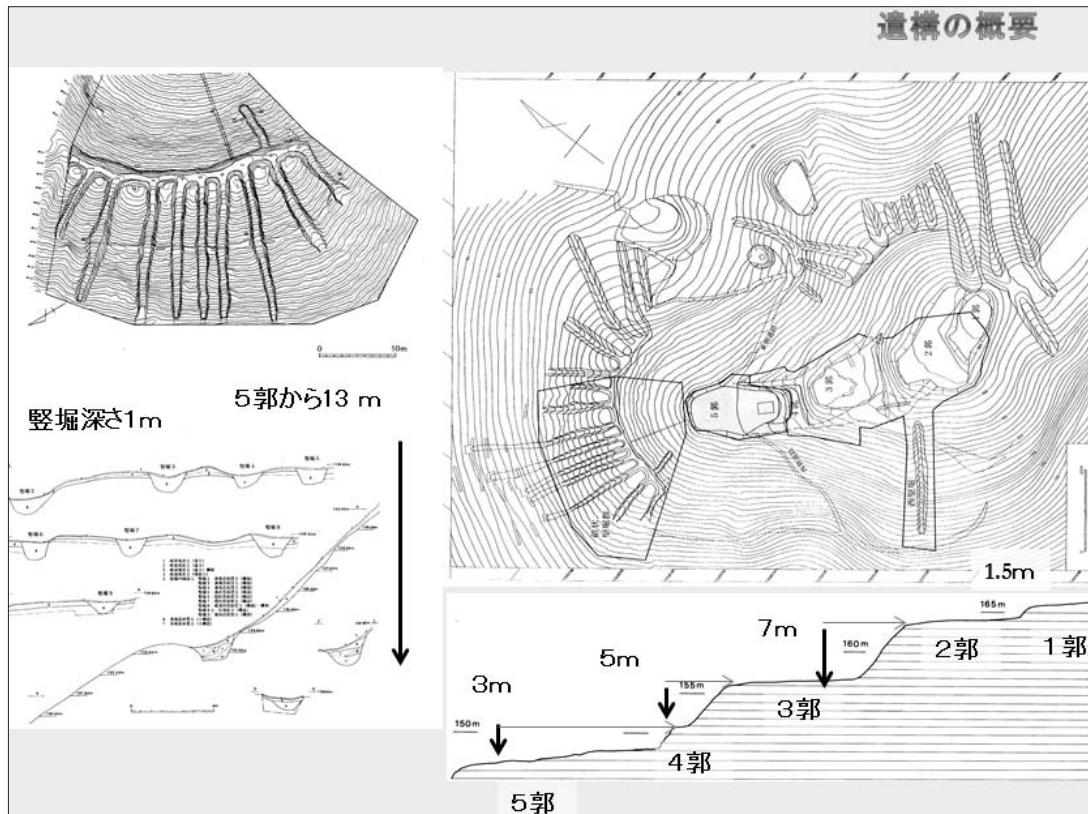
腰にロープを結んで掘り下げていただきました。安全のために、もちろんここに作業用の平坦面はついているんですが、写真のような状況で調査を進めていました。

当然と言えば当然ですが、この豊堀からも遺物はほとんど出ていません。

これは1郭から5郭までのそれぞれの高低差を示した図面になります【スライド13】。1郭の南端から2郭の間は1.5mの高低差があり、2郭と3郭が7m、3郭と4郭が5m、4郭と5郭はほぼ同じような平坦面ですが、3mの高低差があります。その5郭から13m北側に横堀を掘って、豊堀を掘っている状況です。

先ほどの家ノ城跡のように、たくさん建物の跡とか、穴というのが出ていないので、個々の性格の説明が難しいのですが、豊状豊堀という防護施設が牛の皮城跡の最大の特徴です。

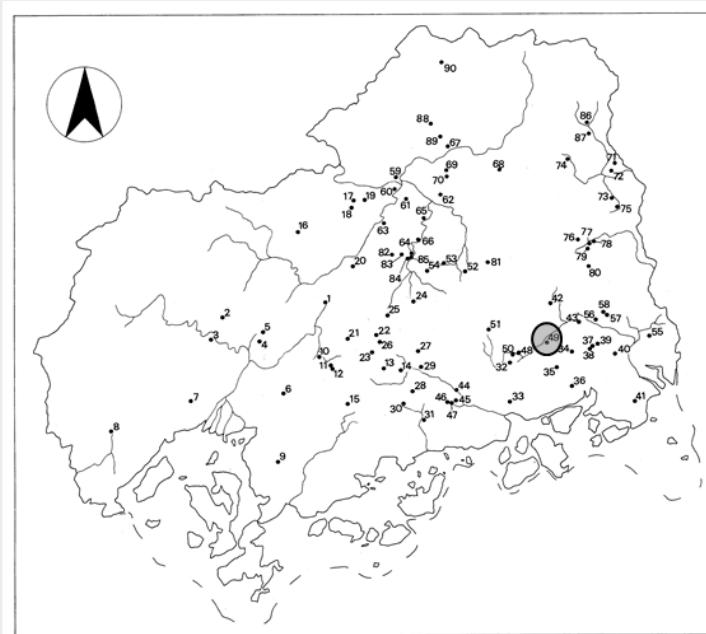




【スライド13】北郭群断面図

まとめ

畝状堅堀群



- ・備後地域に多い。(90例)
- ・毛利・吉川氏の領国内は少ない

成立は?
永正期(16世紀前半)
最盛期
天文期(16世紀中頃)
終焉
永禄期(16世紀後半)
火縄銃の普及?

畿内から
中国地方へ普及

畝状堅堀群が確認できる城館遺跡分布図

(広島県中世城館遺跡総合調査報告書第4集による)

- 時期は? (研究成果から)

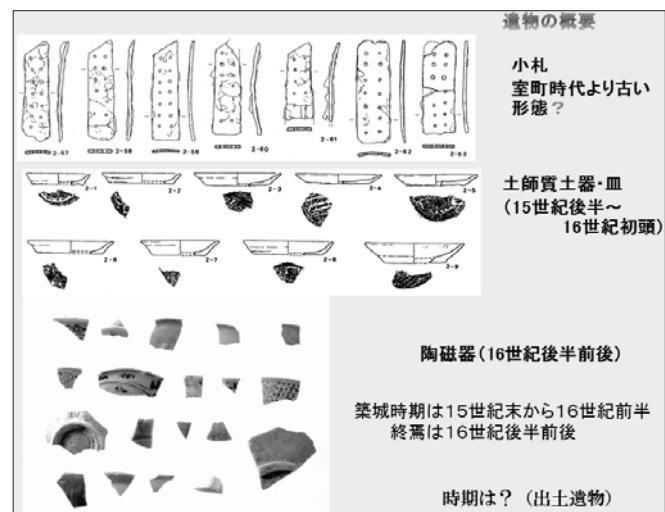
【スライド14】畝状堅堀群が確認できる城館遺跡分布図

このお城の特徴である敵状堅堀というのが、広島県ではどういう状況で出るのかという図面が、これになります【スライド14】。調査された時点で90例が確認されています。ドットを見ていただきますと、備後地域に多いというのが分かります。大きい黒丸で示しているところが牛の皮城跡の場所になります。

研究成果から、敵状堅堀が成立したのが、ここに書いてありますように16世紀前半で、つくられなくなるのが16世紀後半ごろです。

畿内地方から中国地方の方へ普及していったんだろうと言われています。

次に、牛の皮城跡がつくられた年代を考えてみたいと思います。敵状堅堀からは16世紀の前半から16世紀の後半ぐらいの間に敵状堅堀がつくられているのが分かりましたが、この写真を見ながら数少ない出土遺物から北郭群の年代を考えてみると、出てきた土師質土器の皿が、大体15世紀の後半から16世紀の初頭に相当する年代になります【スライド15】。上にあります小札という鎧の部品になるんですけど、これは少し古い形態ではないのかなと見られるんですけど、僅かなものですから、これだけではなかなか年代が分かりません。



陶磁器類から見ると16世紀後半頃の青花といわれる焼き物が出ています。

これより新しい器も近世とかのものが出ていているのですが、多分、15世紀末から16世紀後半頃の間に北郭群が使われていったということが、遺物から言うことができます。あと、城主ということになるのですが、敵状堅堀の形態とか、遺物の年代から大体15世紀の末から16世紀の後半に存続したことが分かってきました。じゃあ、史料から見るとどうなんだろうかというのを調べてみたのがこの写真です【スライド16】。まづ『芸藩通志』の中に「森光新四郎景近」が城主であったと言い伝えがあるという記

録があります。

ほかに明応2年(1493)、15世紀の末から文禄3年の16世紀後半までの間に森光氏というのが、この間に御調郡内に所領をもっていたということが分かりました。だからと言って、牛の皮城の城主が森光新四郎景近という根拠にはならないんですが、少なくとも森光氏がこの御調郡に居たということが文献からも分かってきました。

実は、牛の皮城跡の北郭群だけの調査だけでなく周辺の麓の調査も行っています。この写真は曾川1号遺跡です【スライド17】。北郭群の北西側の麓になりますね。こ

まとめ

芸藩通志
牛皮城 大町村にあり、森光新四郎景近、所居と云、景近は、天文年中(1532~1554)、尼子家、三吉攻の日、加勢して、方名ありしものなり。

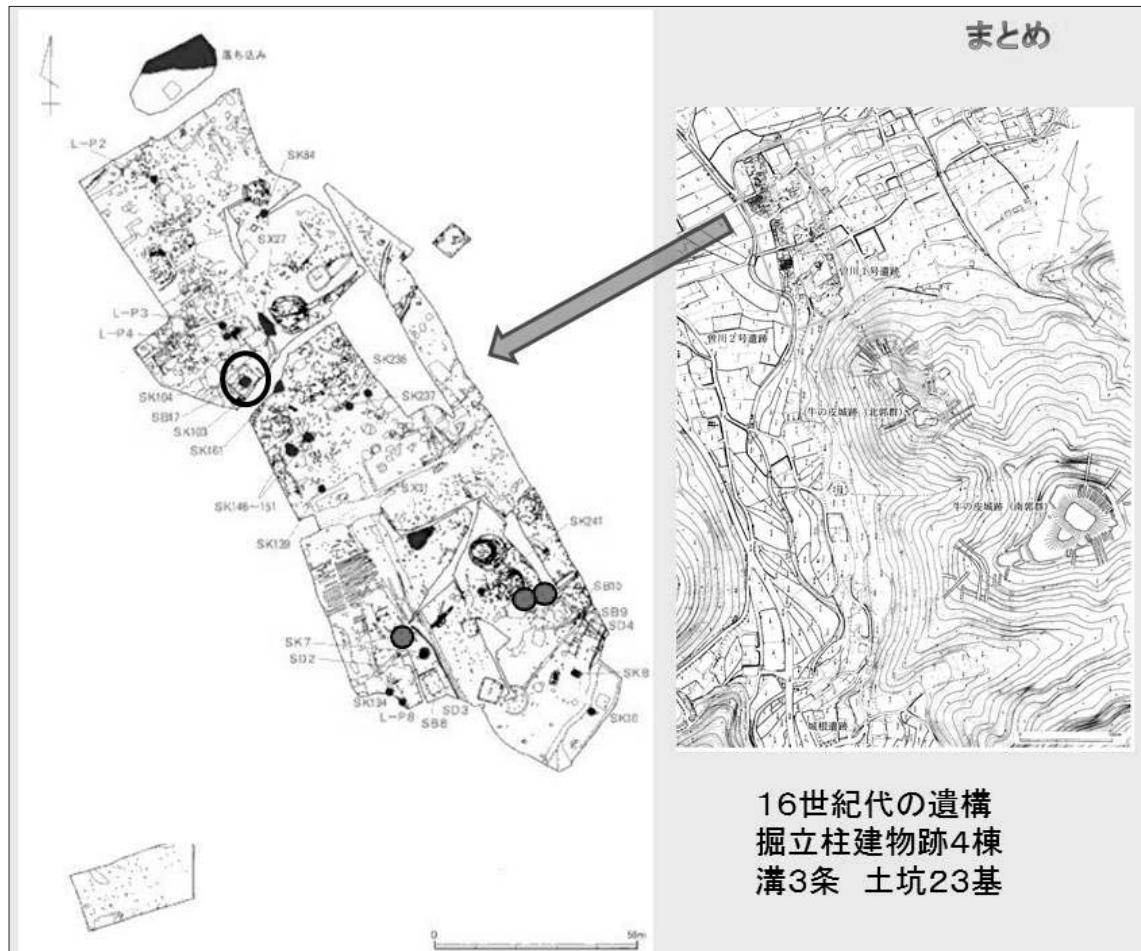
明応2(1493)年5月に山名俊豊が山内刑部四郎通久へ『備後國御調郡の内三吉敷名跡七拾貫文、三吉森光跡式拾五貫文、三吉池上跡式拾五貫文』の所領を与えるとの文書を送っていることから⁽³⁾、これまで三吉氏が御調郡内に所領をもっていたこと、山名政豊方についていたこと、御調郡内に敷名・森光・池上の各氏が存在していた事がうかがえる

天文13(1544)年の尼子晴久、国久による三吉攻めの際、上里、森光、矢田、国富、吉原などが三吉方(毛利)について、勝利に貢献した記録⁽⁴⁾がみられる。

文禄3(1544)年の毛利輝元知行宛行状に林志摩守元善に御調郡守光氏の旧領が宛てられていることから、守光(森光)氏の勢力がこの地域から失われた事をうかがうことができる。

● 城主は誰?

【スライド16】牛の皮城跡・森光氏に関わる史料



の調査では16世紀代の遺構が確認されています。左側図面で示した●印が掘立柱の建物跡になります。ここでは掘立柱の建物跡が全部で4棟出ています。建物跡に伴う溝状の遺構3条、土坑が23基出ています。

ただ、これらが北郭群にいた人たちの生活の場かどうかは分かりませんが、少なくとも何らかの関係があるであろうと、想像に難くないと思います。

左側の配置図の中央の○で囲んだ中に●で示した土坑があり、そこから焼けた土が多量に出土しています。その近くの穴からも鉄滓などが出土しているので、鉄に関わる何らかの作業をしていたような痕跡と考えられます。

調査の結果、何が分かったかということをまとめたのが、このスライドになります【スライド18】。上から順番に言いますと、非常に大規模な城跡の中の北郭群の調査、これもほぼ郭の全面調査を行いました。

残念ながら、建物跡などの遺構は確認できなかったのですが、無いなら無いなりの「何か」を考えなければならないと思います。

調査中にこれまで確認されていなかった東側斜面で敵状堅堀を調査で確認しました。

全体から見ると、城の前面から北側の方に堅堀群があるので、東側方向に対しての防備を備えているとも思われます。

次に、遺物とか、遺構の数が極端に少ないということです。

もう一つは、少ない遺物から見ると15世紀末から16世紀前半につくられ、ほぼ100年間継続して機能していたということも分かりました。

まとめ
<ul style="list-style-type: none">・ 大規模な城跡の北郭群の調査(ほぼ全面)・ 北廓群調査中に東側の敵状堅堀を新たに確認した。・ 城跡の全面から北側に厳重な防備をそなえる。・ 遺物・遺構が少ない。・ 出土遺物から15世紀末から16前半に築かれ16世紀後半までの約100年間機能していた。・ 文献資料から当地域に、森光氏がいたことがわかり終焉の時期が同一。・ 曾川1号遺跡と関連する可能性が考えられる。

【スライド18】まとめ

文献資料からも終焉がほぼ同時期であることが分かったということと、御調地域に森光氏がいたということが分かりました。

最後に、麓にある曾川1号遺跡から中世の16世紀代の建物跡などの遺構が出ており、牛の皮城跡との関係が考えられるということが分かりました。

少し早口で予定の時間も過ぎました。簡単ですが私の報告とさせていただきます。
御静聴ありがとうございました。

出典一覧

スライド1：地図 国土地理院発行 1：25,000地形図 N I -53-27-13-2 ふちゅう（岡山及丸亀13号-2）府中を使用。

スライド2・4・10・12・13（左上下・右上）・15：財団法人広島県教育事業団『牛の皮城跡・曾川2号遺跡 中国横断自動車道尾道松江線事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書（1）』2005年 の図・図版より作成。

スライド3・6・13（右下）・15・17（右）：財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書（4）白根遺跡・曾川1号遺跡（E地区）・牛の皮城跡（第4次）』2008年 の図・図版より作成。

スライド5・7・8・9・10（右下）・11：広島県立埋蔵文化財センター収蔵写真資料より作成。

スライド17（左）：財団法人広島県教育事業団『曾川1号遺跡（L・M地区）一般国道486号線道路改良工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書』2010年 図より作成。

スライド14・16・18：発表者作成。

事例報告Ⅲ 「城平山城跡（呉市焼山西）の発掘調査」

調査研究員 山澤 直樹

紹介にあづかりました山澤です。

私は、8年前に調査した城平山城跡について報告します。

この城跡がありましたのは、呉市焼山西にある円福寺の裏山です【スライド1】。この辺りは、焼



山のほぼ中央に位置し、北は熊野方面、南は吉浦方面、東は神山方面、西は天応方面へと通じる交通の要所に面しており、町の役場やスーパー、そして町の中心神社である高尾神社などが集まる町の中心地となっています。

この調査は、呉と熊野を結ぶ県道31号線、呉平谷線の焼山区間ににおける交通渋滞を解消するとともに、市街地の活性化を目指した焼山西バイパスの建設に伴って行いました【スライド2】。呉市にとっては、郷原で石畳を発掘調査して以来の約15年ぶりとなる発掘調査で、公式なものとしては初めての



【スライド1】遠景



【スライド2】城平山城跡位置図

城跡の発掘調査となりました。

では、ここで少し呉市の遺跡について触れたいと思います【スライド3】。

呉市は、山が海に飛び出したような地形となっており、平地部が少なく、山陽道から外れた位置も関係してか、遺跡は決して多いと

は言えません。しかしながら、焼山を中心に古くは旧石器時代、そして縄文・弥生・古墳と各時代にわたる遺物の包含地が知られており、貝塚もあります。さらに、焼山の北にある寺屋敷には古代の密教寺院があったとも言われています。

中世には城跡が各地に見られます。沿岸部では天応の天狗城跡、吉浦の茶臼山城跡、呉湾の方面では小早川氏と野間氏が争ったと言われる城山城跡、更に山本氏が構えたと言われる杉迫城跡などがあります。山間部を見ますと、城平山城跡を始め、堅堀などがある苗代町の掃部城跡、野間氏の家臣である渡辺氏が構えたと言われる城山跡、矢野と焼山の境にあるマミガ城跡などがあり、野間氏系の城跡と言われています。そして絵下山の背後の矢野には、野間氏の本拠である矢野城跡があります。

それでは早速、城跡の説明に入りたいと思います。円福寺の裏山は「城平山」、又は「城ヶ平山」と呼ばれており、比高が30mから40mほどの非常に低い小さな山です

【スライド4】。平坦気味な頂部は公園となっており、そこから南を流れる二河川に向かって急な斜



【スライド3】遺跡等分布図



【スライド4】城平山城跡遠景

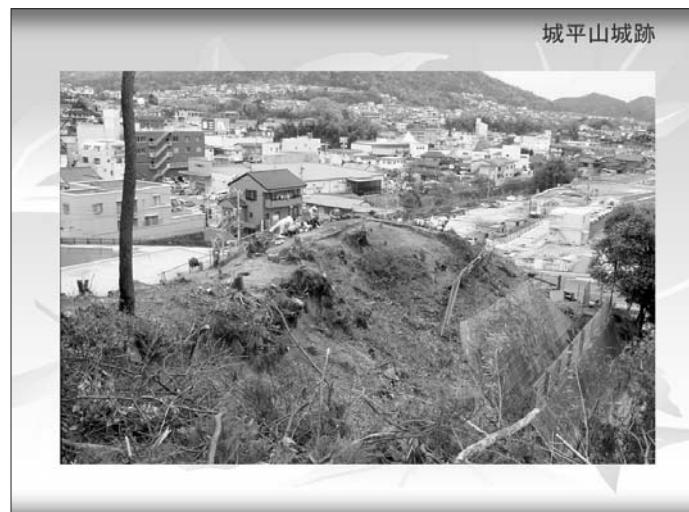
面が延びています。それがやや平坦気味になった先端部分に城跡はありました。こちらは比高が17mぐらいですが、非常に見晴らしがよく、焼山一帯を見渡すことができます【スライド5】。

現場は非常に狭い急斜面の尾根筋で、崩れたところもあり、作業は人力で行いました。調査の結果、4つの平坦面、その背後に土橋状の遺構を確認しました【スライド6・7】。こちらは前面から見た写真です。城跡が円福寺のすぐ裏にあるのが分かるかと思います【スライド8】。

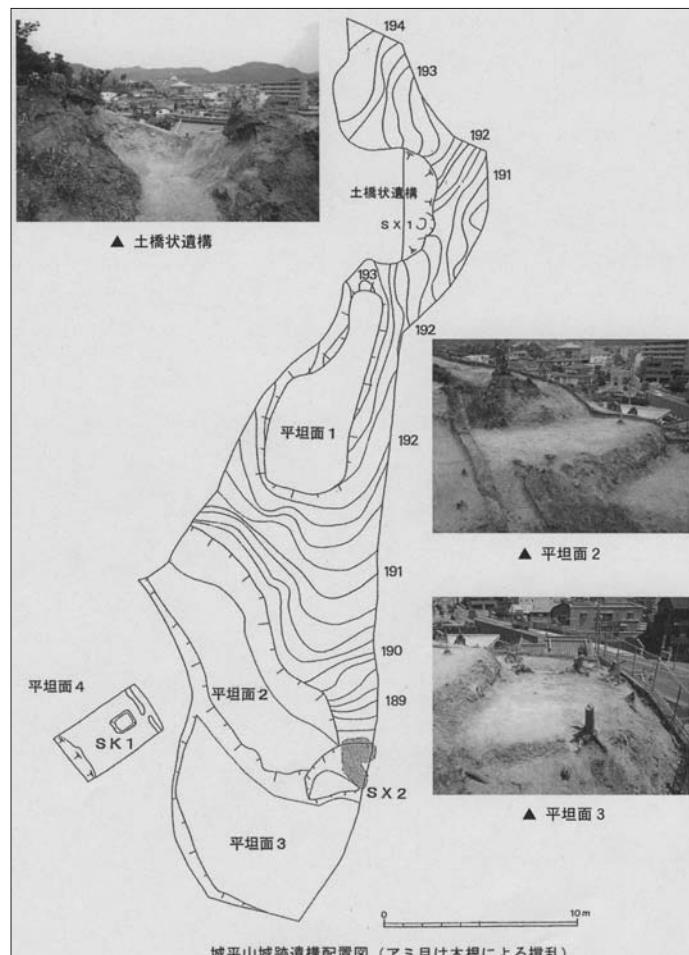
では、まずこの平坦面を上から順に説明していこうと思います。

こちらは一番高いところにある平坦面1で、中心的な平坦面と考えられます【スライド9】。切岸がなく、自然の斜面を利用しています。周縁部も非常になだらかで、範囲が曖昧ですが、4m×11mぐらいと考えられます。遺構や遺物は出ていませんが、土橋状の遺構に向かう斜面に焼土の塊や炭化物が多く出ており、恐らく隅の方で火を焚いたと推測されます。

そこから南にやや離れて平坦面

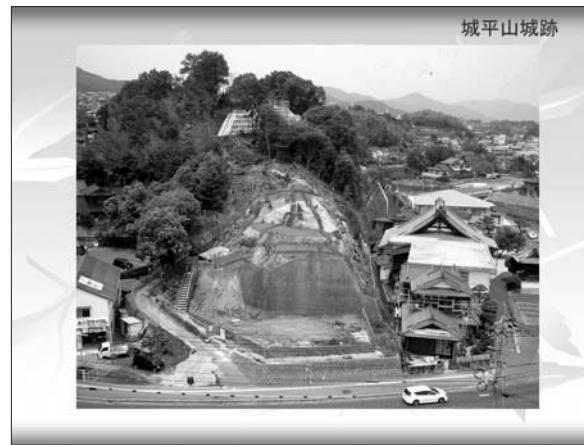


【スライド5】城平山城跡全景





【スライド7】空中写真



【スライド8】遠景

2 があります。平坦面1との高低差は約4mあります。こちらは上層、下層の二面あり、2時期にわたる使用が考えられます。まず、上層から見ていきます【スライド10・11】。ご覧のように、非常に横長の平坦面となっていまして、 $3\text{ m} \times 13\text{ m}$ ほどの広さです。特に柱穴などの遺構は検出していませんし、遺物も出ておりません。下層から約20cm土を盛って造っています。その盛土の中から近世の陶磁器の破片が出ていますので、この平坦面の上層は近世以降の造成で、城跡とは関わりがないと考えられます。



【スライド9】平坦面1



【スライド10】平坦面2（上層）

続いて、その下の下層ですが、

そこまで広さは変わりません【スライド12】。斜面をL字状に抉つて、その土を手前に盛ることで平坦面を造っています。こちらも特に柱穴などの遺構はなく、唯一携帶用の砥石のような薄い粘板岩製の板石が出ていますが、城跡と関わるものかは分かりません。平坦

面2の下層の隅には、SX2という掘り込みのようなものがありました。木の根によって攪乱を受けたので、もとはどんな形か分かりませんが、ひょっとしたら平坦面3から2への登り口みたいになっていたのかもしれません。

次に、その下にある平坦面3ですが、こちらは広さが6m×9.5

mほどです【スライド13】。手前は法面となっており、前からの写真は撮れませんでした。この平坦面もやはり遺物がなく、遺構も検出していません。

この平坦面3の西側下方には平坦面4がありました。地元の方から「昔は畠だった」という話もあ



【スライド11】平坦面2（上層）



【スライド12】平坦面2（下層）



【スライド13】平坦面3

りましたので、トレーニング調査にとどめました。その結果、平坦面4では土坑を確認しました【スライド14】。この土坑には、ご覧のように石や瓦、近世の土器を廃棄していました。平坦面4でも近世の陶磁器とか出ていますので、これらは城跡とは関係ない近世の造成と考えられます。

では、今度は平坦面1の背後にありました土橋状の遺構です【スライド15】。こんなふうに崩れたりしていますが、当初は東隅のみが残った堀切と考え、これを堀切に埋まった土と考えていました。

しかし、表土を除去すると、堆積土ではなく地山が出てきました。土橋状の遺構になりました。これは、意外と角度があって登るのも大変です。こちらは別方向から見た写真ですが、このような土橋状になっています【スライド16】。

幅が狭くて1mもないくらいです。土橋部分の真ん中にSX1という掘り込みがありましたが、土橋に



【スライド14】平坦面4 SK1



【スライド15】土橋状遺構



【スライド16】土橋状遺構

関わるものなのかよく分かっていません。

ところで、土橋というのは堀切の真ん中ぐらいに設けるのが一般的ですが、城平山の場合は脇の方に造っています。県内でもそういった片脇に設けた土橋が見られます。それをいくつか紹介したいと思います。

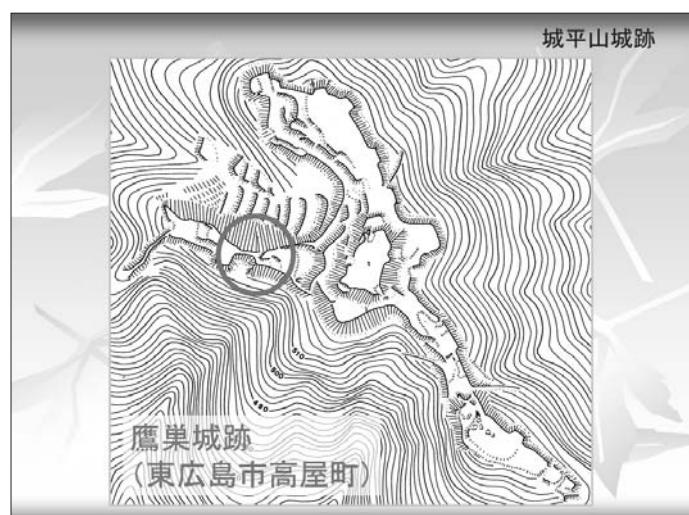
これは発掘調査も行われた広島市安芸区の三ツ城跡ですが、ここに片脇寄りの土橋が確認できます【スライド17】。

続いて、東広島市の鷹巣城跡です。非常に大規模な城跡で、ここに郭と帯郭をつなげる片脇寄りの土橋が見つかっています【スライド18】。

次に福富町の福原城跡ですが、2か所そのようなものが見られます。ただし発掘調査が行われ、堀底道が上の郭につながるという形態になっていることが分かったので、若干性格が異なると思われます【スライド19】。



【スライド17】三ツ城跡（広島市）



【スライド18】鷹巣城跡（東広島市）



【スライド19】福原城跡（東広島市）



【スライド20】大道城跡（東広島市）



【スライド21】滑山城跡（福山市）

続いて、河内町の大道城跡ですが、最高所の郭から背後の丘陵に向けて片脇の土橋がつくられており、形態的には一番城平山城跡に似ている感じがします【スライド20】。

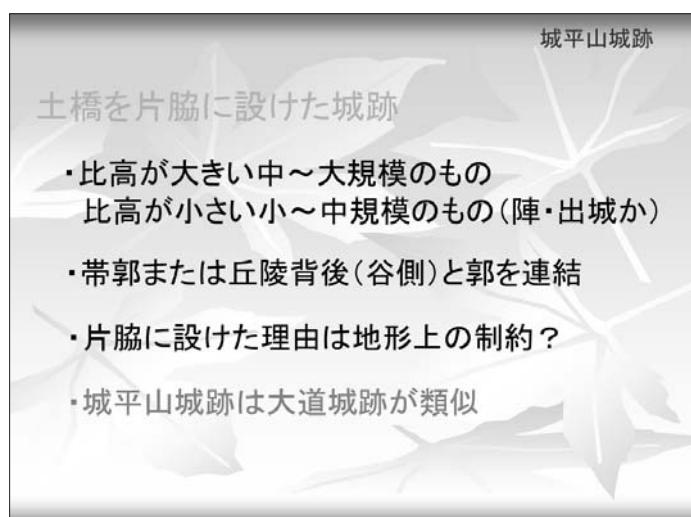
さらに、福山市の滑山城跡ですが、城の中央付近に片脇寄りの土橋が見られます【スライド21】。

そして最後に、神石高原町の大床山城跡ですが、このように片脇寄りの土橋が見つかっています。こちらは丘陵背後ではなく丘陵の谷側の方に向けてつくられています【スライド22】。

このように土橋を片脇に設けた城跡をみると、概ね比高が大きい



【スライド22】大床山城跡（神石高原町）



【スライド23】土橋の整理

中規模から大規模のもの、そして比高が小さい小規模から中規模のものに分かれそうです。後者は陣か出城かと思われます。形態的には、「帶郭と郭」、あるいは「丘陵背後、谷側と郭」を結ぶものが見られます。なぜ片脇に設けるのかは、なかなか分かりません。恐らく地形的に左右対称の尾根だったらいいんですが、若干片側に偏っているみたいな地形上の制約もあったのかもしれません【スライド23】。今日、お越しの先生方にもお聞きしたいところです。

土橋の存在意義は、やはり敵の襲来をおさえるといったことが考えられます。城平山城跡の場合は、下から順々に平坦面を設けていますし、手前には二河川も流れていますので、背後よりもこちら側からの敵の襲来に備えたものと考えられます【スライド24】。その意味では、自分たちも逃げて、その後に敵が押し寄せるのを防ぐといった逃げ道的な意味合いもあったのかと思ったりします。そうなりますと、その先を上ったところにある平坦気味な頂部には何もなかったのか、非常に気になります【スライド25】。実

は、私は生まれも育ちも焼山みたいな人間でして、傍にある小学校に通っていたこともあり、「この頂部に城跡があった」と聞いてきました。転校した後、転校先の小学校で歴史クラブに所属して、この山を訪れた時にも、地元の古老の方に「ここ（頂部）に城跡があつ



【スライド24】空中写真



【スライド25】遠景

た」と聞きました。

実際、これはどうなのかということで、郷土の歴史関係文献にあたったのですが、ほとんどが「ここ（頂部）に城跡があった」と書かれていました。「僕たちが掘ったのは何だったのだろうか」。ここで私が注目したのが、吳市入船



【スライド26】安芸郡焼山村絵図

山記念館に所蔵されている焼山村の古い絵図です【スライド26】。非常に簡素な絵図ですが、それなりに山の形を再現してあるのが分かります。山の名前が「城ヶ平山」とあり、その隣の頂部のところに「古城跡」と書いてあります。「道場」というのは円福寺になります。この絵図を見ると、頂部に城跡があったみたいな感じがします。

これだけではいけないと思い、もう一つ、『芸藩通志』にある焼山村の絵図を見ました【スライド27】。こちらは、更にリアルに山の形を再現しており、頂部に「城平山」、そこを下って段になった所に「道場」と書いています。「道場」の隣ではなく「城平山」の隣に「古城跡」と書いてあるのを見ると、どうやらこの時代も「ここ

頂部に城跡があった」と認識していたようです。それを示すように、「頂部に城跡が
あって、その先に見張り台のよう
なものがある」といった伝承もあ
ります。ですから「その見張り台
のようなものが、私たちが調査し
た区域のことを指してゐるのではないか」、そんな感じもいたしました。

そう考えますと、この頂部に城
の本拠があつて、その先に私たち



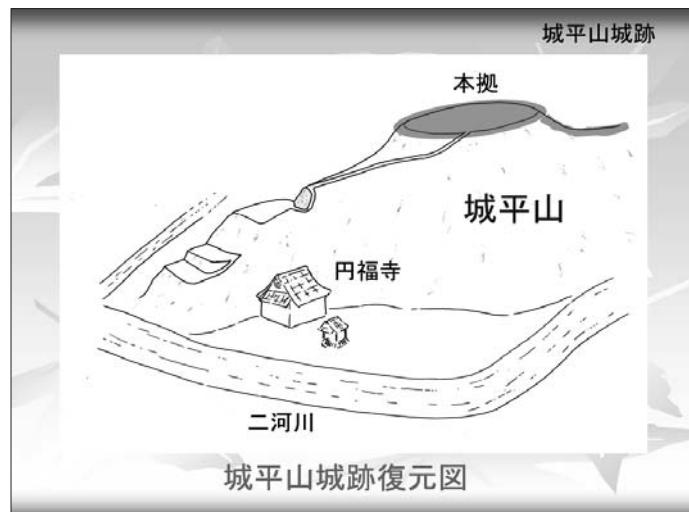
【スライド27】焼山村絵図

が調査した城跡がある二段構えの城跡であった可能性もあります【スライド28】。反対側も頂部から北に向かって斜面が下っていきます。この斜面にも何かあった可能性はありますが、頂部に墓苑ができる前は公園で、斜面には公園に続く道路ができていました、

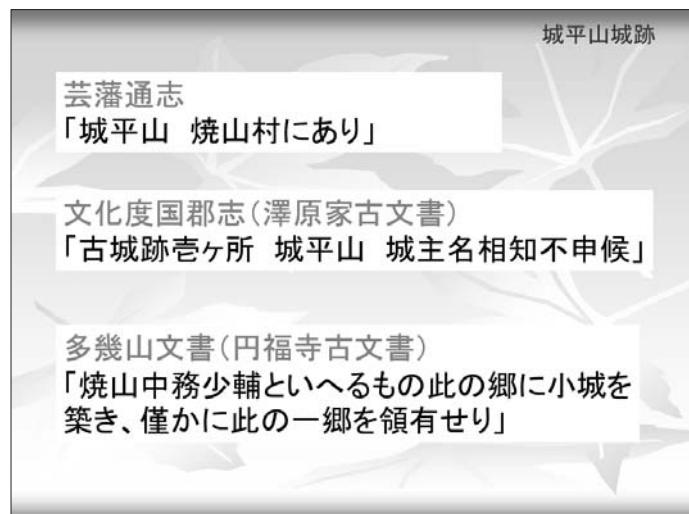
何かがあったにしても遺構は消滅していると思われます。

もっと城跡のことを知るべく史料に当たってみました【スライド29】。『芸藩通志』『文化度国郡志』に僅かに記述がありましたが、大したことは分かりませんでした。このほか、円福寺の古文書に「焼山中務少輔という者が、城の主であった」といった記述がありましたが、名前もオーバーですし、公的な歴史的史料ではないために、ちょっと信憑性が薄いと思われます。ただ、この文書の中に、城主と村の中心者との関係、あるいは城主と寺の関係とかに関する記述がありました。実際に城平山には円福寺の墓地がありますし、昔は高尾神社もこの辺りにあって、城と寺と神社が一体化していたという説があり、村との結びつきが強い、村の城のような側面が感じられます。

では、地域史の研究の中では、どう位置づけられているか。吳市の西側から北にかけては、野間氏が勢力を置いていたと言われており、実際にその地域の城跡には、野間氏の伝承が多く伝えられています【スライド30】。一方、吳湾一



【スライド28】城平山城跡復元図



【スライド29】城平山城跡に関わる史料

帶は大内氏の勢力があり、野間氏が呉湾の方に入り込もうとして小早川氏などと抗争を起こしています。そういった勢力が攻めていくには、呉平谷線が想定されますが、この道が主要道路になったのは戦後で、それ以前はむしろ神山を抜けるルートが主要道路でありました。

た。実際、その道は「呉街道」、ここの神山峠は「呉峠」と呼ばれていたことがあります。

そう考えますと、非常に神山というのが大事な場所になってきます。この神山は、今は「神」ですけども、昔は戦の陣をはるの「陣」であったと言われており、実際にこのあたりは戦にかかわる地名が多く残っています。ですから、ここに陣山城があったと昔から言われています。そして、神山のあたりが城平山からしっかりと見えます

【スライド31】。

では、南の方角はどうなのか。茶臼山城跡が吉浦にはありますが、こちらは山が邪魔して見ることができません。しかしながら、吉浦と焼山の境にある鍋土峠の小高い墓苑が山の谷間をぬって見事なぐらに見え、そこから吉浦の茶臼山がくっきりよく見えます。実際、茶臼山の北東方向に正連坊という野間氏関連の宗教施設があったと言われていますので、ここに何かあった可能性はあると思います。

さらに、城平山城跡が絵下山麓

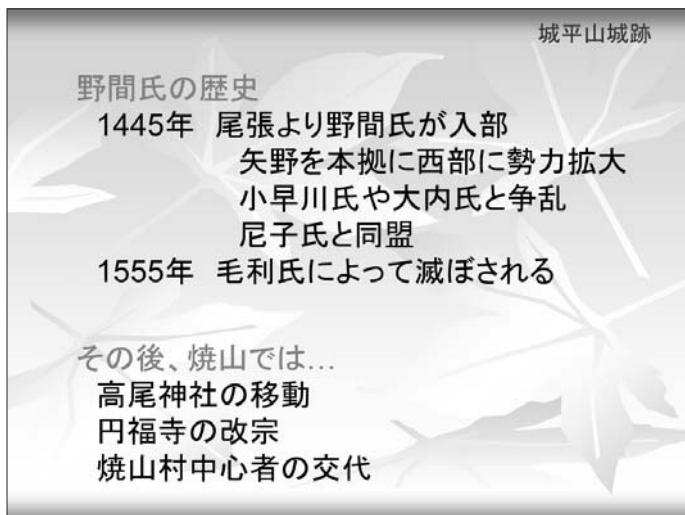


のマミガ城跡からくっきり見えます。

そう考えますと、あくまで仮説ですけれども、呉湾方面に敵を持つ野間氏が、このような城砦ネットワークをつくっていた可能性があります。その意味では、非常に中継的ないい場所に城平山は位置していると言えます。

野間氏については分かってないことが多いのですが、1445年に尾張から矢野の方に来たと言われています【スライド32】。矢野城を拠点としながら坂、天応、吉浦、焼山、栃原と東部に勢力を拡大し、事あるごとに小早川氏や大内氏とも争ったりしています。さらに、尼子氏と結んだりして呉市に勢力を伸ばそうとしますが、1555年毛利氏によって滅ぼされています。

その後の焼山では、非常におもしろい動きがありまして、お城の



【スライド32】野間氏と焼山の動向

近くにあった高尾神社が現在の地に移動しています。この城跡の傍にあった円福寺も真言宗から浄土真宗へと改宗しています。不思議なことで、吉浦の真言宗の3つの寺もこの時期に廃寺になっています。これも連動した動きなのかもしれません。さらに焼山では、村の中心者も交代しています。そういういた焼山にとって大きな出来事が次々と起きていますので、やはり野間氏の滅亡との関連、城平山城跡と野間氏のつながりというのを感じます。

そういうことを踏まえて、もう一度考えてみると、この城跡は余りにも簡素で不明瞭な部分が多く、やはり村の城的な要素が強いと感じられます。もともとこちらに村の城みたいなものがあり、その後、野間氏が入ってきて、そこを活用する形で大きな城跡をつくったという可能性もあると思います【スライド33】。ひょっとしたら、野間氏の城と村の城が別々だったかもしれませんし、様々なケースが考えられるので

すが、本拠の後ろの方は削平を受けて遺構はないでしょうし、あとは史料的な何かが見つかれば、もっと実態が解明できるのかもしれません。それは今後の研究にとっておきたいと思います。

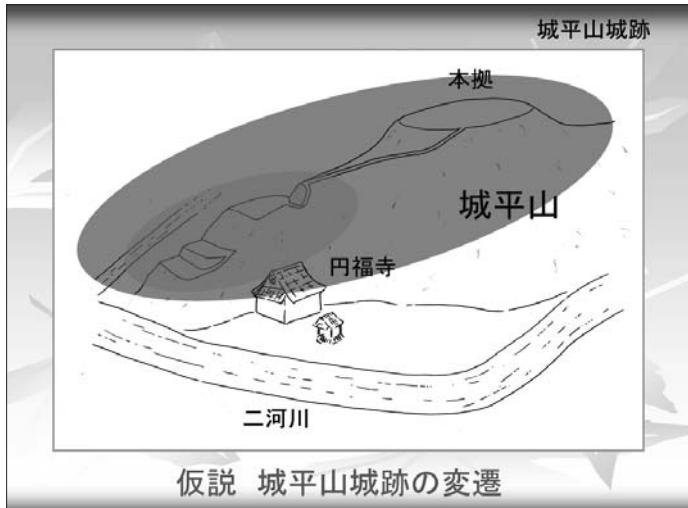
最後にまとめですけれども、この城跡は3つの平坦面と土橋状遺

構を持った小規模な城跡です。比高も小さく、遺物が出土していないことから、砦的な臨時施設であったと言えます。近くに円福寺の墓苑があったり、村の城的な側面を感じられるのが特徴です。絵図を踏まえますと、そこだけではなしに頂部にも本拠があった二段構えの城跡であった可能性もあります。交通の要所に位置して見晴らしもよく、野間氏と伝えられる城跡の中継的な場所にあることから、野間氏の城砦網の一つであった可能性もあり、そういう面では出城的な要素もあると言えるでしょう

【スライド34】。

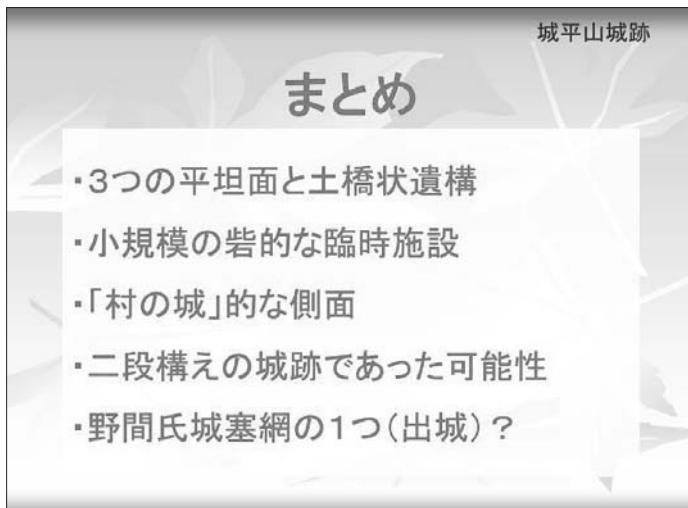
本当に遺物も出土していないし、遺構も検出していないということで、不明瞭な点が多い城跡なんですけれども、発掘調査の機会が少ない呉市にとっては、歴史研究上の大きな成果になったと思います。

こういった発掘調査が少ない地域でありますので、作業員さんを集めのも大変でした。焼山の地元の方が声をかけあって、作業員さんを集めてくださいました。協力していただいた皆様に感謝の言葉を述べつつ、私の発表を終えた



【スライド33】仮説・城平山城跡の変遷

【スライド34】まとめ



いと思います。どうも御静聴ありがとうございました。

出典一覧

スライド1・4～15・24～26：財団法人広島県教育事業団『城平山城跡』（財団法人広島県教育事業団発掘調査報告書第29集）平成21（2009）年 の図・図版より作成。

なお、スライド26の絵図は、慶応2（1866）年に作成されたもので、現在は呉市入船山記念館に所蔵されている。

スライド2・3・30・31：国土交通省国土地理院発行の1：50,000地形図「呉」を使用し作成。

スライド16：広島県立埋蔵文化財センター収蔵写真資料より作成。

スライド17：広島県教育委員会『広島県中世城館遺跡総合調査報告書』第1集1993（平成5）年の図より作成。

スライド18～20：広島県教育委員会『広島県中世城館遺跡総合調査報告書』第2集1994（平成6）年の図より作成。

スライド21：広島県教育委員会『広島県中世城館遺跡総合調査報告書』第3集1995（平成7）年の図より作成。

スライド22：広島県教育委員会『広島県中世城館遺跡総合調査報告書』第4集1996（平成8）年の図より作成。

スライド27：芸備郷土誌刊行会『復刻 芸藩通志』第2巻

スライド29：『芸藩通志』、『文化度国郡誌』（澤原家所蔵）、『多幾山文書』（円福寺所蔵）は中村末吉『呉及び其の近郷の史実と伝説』第4輯1980（昭和55）年 より作成。

スライド23・28・32～34：発表者作成。